山のたより
奥多摩
《第52号》
平成31年1月15日
(一社)奥多摩観光協会

鈴木　理央　絵

新年のご挨拶

新年あけましておめでとうございます。昨年は友の会入会、イベントに参加等、ありがとうございました。お陰さまで、これまでのところ事故もなく、順調にイベントを開催しております。今年もよろしくお願いいたします。

日本百名山の著者深田久弥、また哲学者で山のエッセイを多数書いていた串田孫一、廃刊後久しい山の冊子アルプなど、当時の山の紀行文を読むと「山旅」という書き方が多く見られます。

交通機関が発達していなかった時代、山へのアプローチは今よりずっと時間のかかることだったでしょう。鉄道、バスを使い目的の山にできるだけ近づきそこから山麓地帯は徒歩のみで、途中日が暮れたら周辺の集落で一夜の宿を探しながら、それも宿屋などなかなか無い時代、お客を迎え入れるゆとりのありそうな家（多くの場合村長の家）を探し、受け入れてもらえたなら、その夜は目的の山の情報収集とともに、時には土地の人たちと酒宴が繰り広げられたこともあったでしょう。それから山頂を目指したのです。これが「山旅」と言われる所以だと思います。

林道を車で最深部まで入り、そこから山頂までピストンしてくる現在の登山、果たしてどっちが豊かな、記憶に残る登山なのでしょうか。交通網の発達、モータリゼーションの進歩は、多くの山を日帰りに、１泊２日に、と身近にしてくれたことは事実です。このやり方も否定できませんが。

しかし、これからの時代リタイアした人たちが増加していくなか、もう一度贅沢な時間を費やす「山旅」を思い出してもいいかもしれません。少なくともアプローチは公共交通機関で、そして、山麓で一泊（土地の人たちとの酒宴はハードルが高いとしても）、そんな提案をしてみたいと思います。また下山後お土産を求めたり、飲食したり、地域経済にも貢献したいものです。

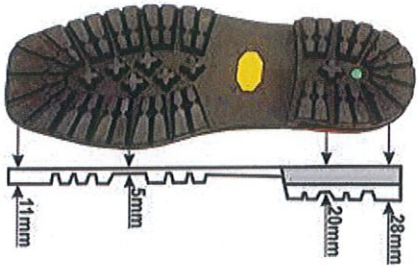
安全を第一に、参加者のみな様が満足いただけるよう、心がけてまいりますので、よろしくお願い申しあげます。

（一社）　奥多摩観光協会
会長　原島　俊二

奥多摩山歩き
～靴底とアイゼン～

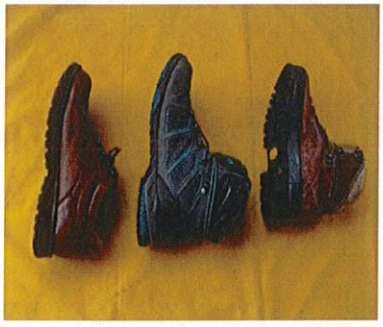
北海道に於ける昨年秋の初雪は稚内・旭川・網走で11月14日と例年より2～3週間も遅かった。しかし、この『来さっせぇ』が読者のお手元に届く頃には、関東地方でも雪の便りが届く。冬は冬眠と決め込まず、以下の事項に留意し低山を楽しもう。

勿論、冬の山歩きには多くの危険を伴うが、その中で特に留意したいのはスリップ事故である。今回は靴底に焦点を当て、どうしたら予防できるかについてヴィブラム(Vibram)底を例に考えてみたい。



Vibram底の規格例。溝の深さ及び踵の厚さに着目。

次の写真はいずれもVibram底の登山靴であるが、靴底に使われているソールの厚さが異なる。



右端に比べて中央は全体に底が薄く溝も浅い。左端では溝はあるが踵と土踏まずの厚みがほぼ同じ。

左の二足で濡れた斜面や雪道を歩くとスリップの危険があり事故につながり易い。右端の靴でも過信は禁物で、積極的にアイゼンを装着して安全性を高めたい。

次に、下の写真左は滑り止めの例である。右端の4本爪スノースパイクでの斜面歩行は危険である。

初めてアイゼンを購入する場合、専門店に靴を持参し、スタッフと相談しながら右の写真のように確実にフィットする物を選びたい。

低山といえども単独登山は自重し、技量に合った山選びと共に、その冬山を熟知した経験者と同行されたい。来シーズンへの体力づくりと併せ凛とした冬山を存分に楽しみたいものである。　（冨士光男）

「雲取山登山」に参加して

平成30年10月15日（月）から16日（火）にかけ、奥多摩友の会「雲取山登山」に参加しました。1日目は、ヨモギ尾根コースから山頂を踏んで雲取山荘へ、雨と霧の中、苦しくも幻想的な山登りでした。山小屋に着くころには雨も止み、夜中にはこんなにも星があるのかと思うほどの満天の星空と部屋から見えた都心の夜景に感動し、また早朝には日の出を拝む幸運にも恵まれました。

山小屋での夜のミーティングに先立ち、「元気に楽しい山登りをするための心得等について」ガイドの田中さんから話がありました。その中で「山に来てから鍛えるのではなく、鍛えてから山に登りなさい」という言葉が心に残りました。つまり「日頃の体調管理と山登りの事前準備」が極めて大事であり、余裕をもって山に登らないと苦しいだけで楽しくないし、安全な山登りはできないよ」ということを言われたものと思います。

また今回は一泊泊まりで知らない方々と山小屋で同室し、苦しい思いや満足感等を共有し、一挙に皆さんとの距離を縮め、絆を深めることができました。これも宿泊登山の醍醐味かと思います。

２日目は、雲取山山頂七つ石山山頂を踏んで鴨沢コースの小袖乗越へ下山しました。徐々に雲が増え高曇りの状況ではありましたが、雲取山山頂では冠雪の富士山から南アルプスの北岳、間ノ岳をはじめ丹沢の山々等３６０度の絶景に見入りました。

今回の登山で奥多摩友の会ガイドの皆様に心を動かされたことを１つだけ紹介させていただきます。

それは山登りのマナーや端正な服装、そして山登りの技術について厳しくもしっかり指導していただけることです。例えば、登山中はペットボトルやカメラ、ポシェットなど落ちそうなものはザック仕舞え・・・うるさいなぁと思っている方がおられたら大間違いですよ！私も落石等を何回か目にしたことがありますが、小石でも当たればすごい威力でとても危険です。日頃から習慣づけることが自分のみならず仲間を守るために大切なことだと思っています。

奥多摩友の会は素晴らしい山登りの団体だと確信しています。今後も友の会の山登りに参加していきたいと思いますので引き続きよろしくお願いいたします。

（会員　冨樫直志）

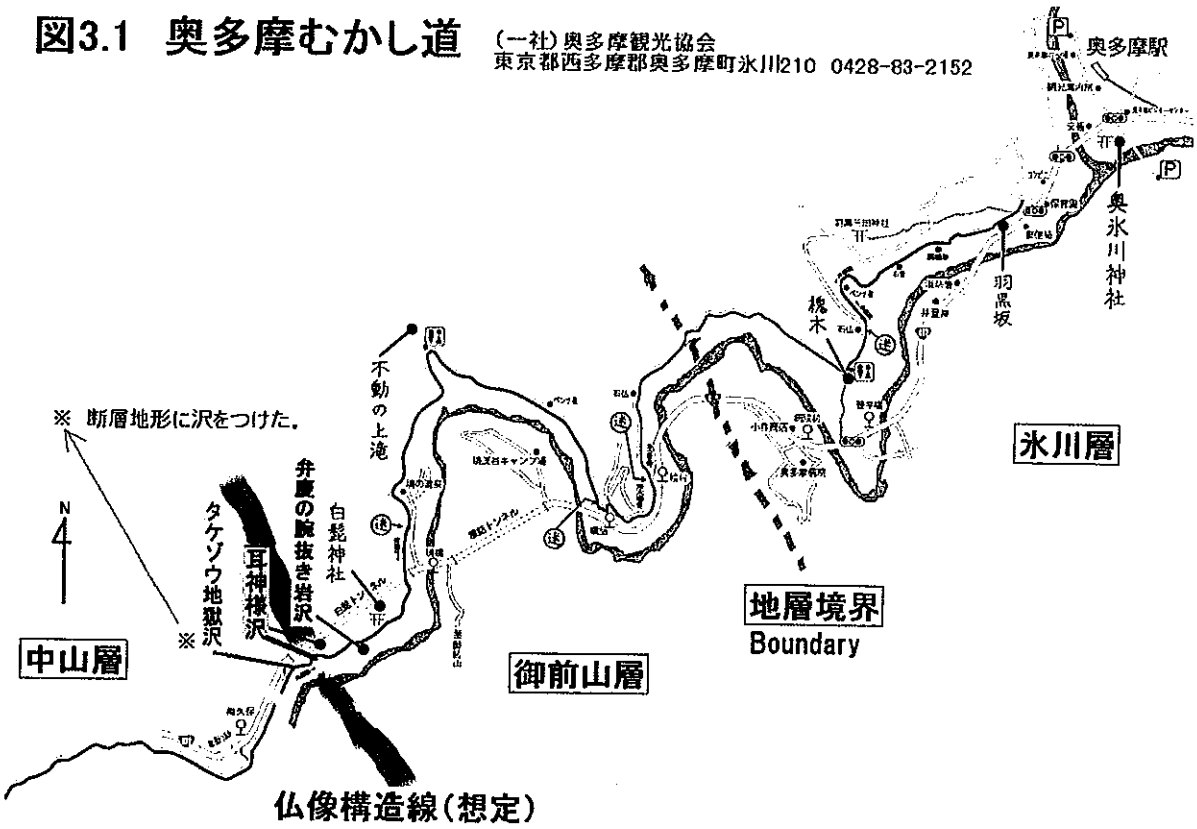
～奥多摩の地質 その3～

3. 奥多摩むかし道で仏像構造線を探す

1. 奥多摩むかし道の地層

奥多摩駅から奥多摩湖までの9.4kmの間で図3.1の通り4種類の地層を見ることができます。

図3.1 奥多摩むかし道 (一社)奥多摩観光協会 東京都西多摩郡奥多摩町氷川210 0428-83-2152



○ 氷川層：頁岩・砂岩、含礫頁岩

○ 御前山層：含礫頁岩・硅質頁岩
天祖・日原などの大規模石灰岩層を胚胎する地層です。
上記二つは南部秩父帯に属します。

○ 中山層：砂岩と頁岩の互層。

○ 水根層：千枚岩質頁岩（図3.1の範囲外）

2. 仏像構造線（以下構造線と略します。）

日本列島を3千kmも走っている構造線が奥多摩町の中にあるとすれば、どんなものか自分の眼で見てみたくなります。

構造線を身近に簡単に見ることができる最適な場所は構造線とほぼ直交している奥多摩むかし道のどこかです。構造線は、石灰岩層を含む御前山層と中山層の境界とされています。

奥多摩地域の地質図（5万分の1）によると、構造線と奥多摩むかし道の交点は石灰岩の大岩からなる白髭神社付近です。現地を歩いてみると断層らしい沢の地形を示す場所は、図3.1に示す通り、弁慶の腕抜き岩付近、耳神様の標識から奥多摩湖側、そしてタケゾウ地獄とよばれている3か所です。これらのうち、弁慶の腕抜き岩付近は断層地形を示しているものの、石灰岩層に挟まれていることから、御前山層に含まれるとみなし、構造線から除外します。

タケゾウ地獄の“沢”の地形は後述の耳神様に較べ規模が大きく構造線の可能性が高いと思われます。

構造線は、多摩川右岸の境橋たもとから栃寄集落へ続く沢とされていることから、逆に栃寄沢を直線的にむかし道側に延長すると耳神様から奥多摩湖寄りの“沢部分付近に当たり、ここが構造線ではないかとも想定されます。

〔参考写真3.1 耳神様付近仏像構造線〕

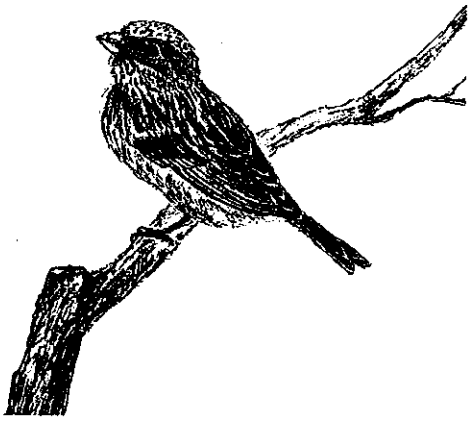
（本渡 康隆）

奥多摩の野鳥
～厳寒の野山に生きる鳥たち～

寒さきびしい奥多摩の自然の中で鳥たち（留鳥、漂鳥、そして冬鳥）は餌を求めて元気に飛び回っています。落葉樹林帯の中に入って行くと、スズメより小ぶりで全体的に桃色をし胸と腰と額が鮮やかなベニマシコの雄。全身が桃色みのある赤い色をしたオオマシコ、スズメより少し大きいが尾はベニマシコより短い。そしてハギマシコ、これはツグミに似ています。かれらは冬鳥として、日本列島に渡ってきます。

今回はその中のオオマシコを取り上げました。

オオマシコ：スズメ目　アトリ科
全長：17cm　翼開長：27cm



大澤新次　絵

本種は冬鳥としてシベリア東部やサハリンから渡って来て、個体数は少なく特に西日本ではまれです。比較的明るい落葉樹林帯やカラマツ林のへりで生活し数羽の小群で見られる事が多く、冬の色の少ない枯野で目撃した時は赤っぽい色彩に感激します。ズミなどの低木の枝の上で実を食べたり、地上でタデ科、イネ科、キク科などの草の実をよくついばんでいます。さえずりを聞くことがありますが非常に小さく聞き取りにくいです。

私は奥多摩のむかし道で２度ほど目撃しました。その時は残念ながら声を聞いていませんが声を聞いたのは山梨県の山中湖畔でした。本種は個体数が少なく繁殖地ではよく生態がわかっていません。

（畑　幸夫）

奥多摩樹木雑考
～冬来りなば春遠からじ～

森の林床が、様々な色彩と香りにおおわれる季節になりました。カエデの紅や黄、ミズキやブナの褐色、そのいずれもが冬の淡い光を集めて静かに横たわっています。林床に足を踏み入れるたびに、足元から乾いた音とともに、ふくいくとした香りがまとわりついてきます。時折、枯葉が頬や肩に落ちてきます。「風も無いのに、枝から突如として一枚の葉が落ちるのも、そこには我々の測り知れない自然のきまりがあるのでしょう」と寺田寅彦はつぶやいています。

葉を落とした枝には、夏の終わり頃からつくられた冬芽がついています。冬の間冬芽が新しい花や葉にならないのは、葉でつくられる植物ホルモンのアブシジン酸が、花芽や葉芽の成長を抑制しているからです。晩秋、落葉がすすむと、枝や芽に残るアブシジン酸は少しずつ寒気にふれて分解し減少していくのですが、その頃には気温が低いので冬芽は伸びられないのです。冬に花を咲かせるサザンカは、アブシジン酸が生成されないか、その影響が少ないのでしょう。

葉を落とした樹木が美しく見えるのは、たくさんの冬芽の命を懸命に支えているそのたくましさのあらわれでしょう。凛とした冬芽のかたちも、それに応えているかのようです。トチノキの枝先をのぞいてみると、樹脂をまとってつややかに光る冬芽が、冬の乾そうと寒さに耐えるかのように、かたくしまった体を見せていました。

橋上一彦　絵

孤々としてそびえる裸木やそれにしがみついている冬芽も、強い北風にさらされる日があるでしょう。北畠八穂（きたばたけやお）の随筆集「津軽野の雪」に、ほほえましい短いくだりがあります。

「うなりァおっかねの、おばァさま」「なんの、なんのあの吹雪はよ、今年生まれてくるものの魂をばはこんできてるのし」「おばァさま、白梅、白桃、リンゴ、梨の花のタマシもか」「あい、ンだもなも、めごコや」……“冬来りなば春遠からじ”

（橋上一彦）

とっておきの山里歩きガイド

「鉄砲祭り」のふるさと・日原

鉄砲祭りといえば、秩父夜祭りの後の１２月第２日曜日とその前日に行われる小鹿野町飯田の鉄砲祭りが有名です。

その昔、日原でも鉄砲祭りが行われていたというので調べてみました。

日原の開祖は、原島家と言われています。祖先は、熊谷付近にあった原島村から荒川を遡って秩父山地を経て日原の倉沢にやって来たとされています。日原の鉄砲祭りは、原島一族が行っていたと思われますが、日原風土記（昭和４３年発行）に、

狩場明神

祭神は原島氏の祖神宮内太郎家義命で鎮座起源は丹生明神社と同様であると云われ、昔は一月七日の例祭には近隣の村々から猟師を業とする者が猟犬をひき多数参詣したと伝えられている。社殿の中には御神体として狩場明神一に高野明神の木像と犬の木像二体が納められている。

年中行事

十月十七日　山の神まつり　鉄砲まつり

猟師が豊猟を祈ってお祭をする。三月十七日も同様のまつりを行う。

との記事があります。

また、明治時代に日原に移り住んだことのある作家・米光関月の小説「鉄砲祭」（明治３７年発行の雑誌・青年界）には次のように書かれています。

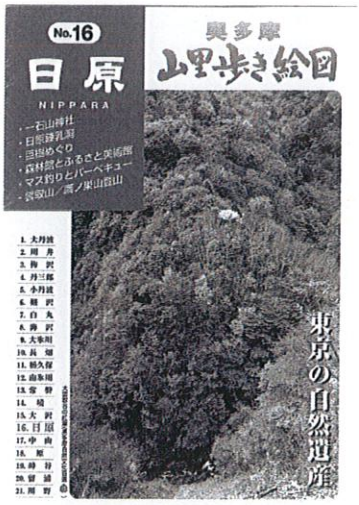
炉辺の正面を見ると、凡そ十四五挺もあろうか、づらり一列に舊式の火縄銃を、鑵打ちにした鉄砲が並べてあるので、見かえると勝手の座敷には老若取り交ぜ、十二三人ばかりの荒くれ男が白丁を四五本前に置いての酒宴の状、ただ一見してこれはと驚いたのは、其各人座を占めた間々へ、見るから恐ろし気な猟犬らしい日本犬の悠然七八匹同じ酒宴の席へ陣取っている……。

（現代文体に改変してあります）

小説とはいえ、米光関月は、日原の山上旅館に逗留した間に鉄砲祭りを見て題材にしたと考えられます。彼自身初めて見た鉄砲祭りの様子を克明に記している点を考慮すれば、ほぼ事実をそのまま書いたと思われます。

元代官の林鶴梁が明治４年の秋に小河内や日原を訪ねた折に書いた旅日記に感銘した田山花袋が明治３３年頃に日原を訪ね、関月に逢ったことを『多摩の水源』という紀行文の中で関月の名前を伏して紹介しています。

上記の著作は、昔の日原を知るいい資料です。図書館やネットで探してみてください。



日原と言えば、鍾乳洞が有名ですが、丹生神社を訪ねて火縄銃時代の「鉄砲祭り」に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

必携は、『奥多摩山里歩き絵図・日原』をお忘れなく。

日原方面へのアクセスが悪いのでバス便を詳細に調べてお出掛けください。　（岡崎　学）

—参考文献—

『日原風土記』　奥多摩町第六地区　昭和４３年
雑誌『青年界』第３号　明治３７年
『多摩の水源』　田山花袋　明治３３年
『豈止快録』　林鶴梁　明治４年の旅日記

冬から春　奥多摩山歩き
～イベント案内　１月から３月～

No.31　１月19日（土）日の出山から大塚山
No.32　２月　３日（日）城山・鳩ノ巣から急登に挑戦
No.33　３月 16日（土）大寺山（仏舎利塔）
No.34　３月 28日（木）早春の奥多摩むかし道を楽しむ

多摩川上流水源地の歴史

奥多摩の水源林は明治時代になり、焼き畑や盗伐されて荒廃していた。明治 34 年（1901）東京府は林業事務所を設置、多摩川上流域にある御料林のうち、一之瀬高橋地区を除く、奥多摩、丹波山、小菅地区の御料林を東京府が買収、水源林の経営に乗り出した。当時の水源涵養理論は、針葉樹の方が広葉樹よりも葉の面積が小さいので葉の面から放出される水分蒸散量が少ない。よって、葉の面積が広く水分蒸散量の多い広葉樹より針葉樹に水源涵養機能があるとし、ブナ、ミズナラなどの広葉樹を伐採して、スギ、ヒノキ、サワラなどの針葉樹を植栽した。植栽した針葉樹はやがて市場に出回り水源林は水源涵養と木材生産という一挙両得の宝の山となる予定だった。近代林学をドイツで学んだ本多静六博士によって行われた。

明治 34 年まず焼畑跡地から植栽を開始、天然林は販売しようとしたが搬出困難なところであり契約できず、そこで本多は製炭（炭焼き）することにした。製炭夫 50 組を岐阜から連れてきて炭焼きを開始した。しかし冬になりあまりの寒さに逃げ出す製炭夫が続出、明治 40 年には約 20 組が残るだけになった。明治 43 年まで製炭は続けられたという。

最初はスギとヒノキを植えたが、寒さのためスギの８割、ヒノキの６割が枯れた。そこで当初予定していなかったカラマツを植えたところ、寒さに強くヒノキの保護にもなることがわかった。上木をカラマツ、下木にヒノキを植えた。

大正 10 年（1921）当時の笠取山（案内板から）

奥多摩地域情報局

１月27日　山のふるさと村冬まつり
２月16日～３月３日　ひな人形展　文化会館
３月　５日　川野車人形　川野生活館　13時～
３月 10日　川野車人形　水と緑のふれあい館
４月 28日　小丹波のおはやし　古里熊野神社
５月　５日　八雲神社獅子舞　　川井八雲神社

奥多摩紹介記事

１１月７日の読売新聞多摩版で氷川小学校安藤教諭の「奥多摩学習」が読売教育賞を受賞したという記事を読まれた方もいると思います。４年生（今の５年生）の児童が現在の奥多摩町の現状を調査し、「いい所がいっぱいあるのに人が少ない」「町の良さが伝われば人は増える」と町のPR策を考えました。町特産の「治助イモ」の栽培から新しい料理法も考え、調理し町民に食べてもらったり、奥多摩の郷土芸能、町内に住む生物、奥多摩産木材などの現状を調査しました。

氷川小だけでなく奥多摩中学校３年生が「奥多摩イノベーション」と言って、「奥多摩ふれあい祭り」で奥多摩のPRをしていました。将来町を背負って立つ子供たちが町の将来を考え勉強していることに感動しました。

（奥多摩中の活動はホームページをご覧ください）

◇生活科・総合学習部門　優秀賞
奥多摩町立氷川小　安藤浩太 教諭 29

「氷川小・道の駅」の前で笑顔を見せる安藤教諭（前列中央）と児童ら

自主性育つ「奥多摩学習」

奥多摩町立氷川小の裏野駐口付近には、色画用紙で作ったワサビ田や特産のジャガイモ料理のレシピ、獅子舞を紹介する壁新聞などがずらりと並んでいる。昨年度の4年生13人が取り組んだ「奥多摩学習」。その成果を掲示した「氷川小・道の駅」だ。

学習意欲は高いが、主体的な学びは苦手――。そんな児童が気になった。自主性を持ってもらおうと、地

（小峰　一郎）

次号発行予定：平成 31 年４月 15 日

発行　一般社団法人 奥多摩観光協会
住所　〒198-0212　奥多摩町氷川 210
電話　0428-83-2152 FAX 0428-83-2789
編集　名人・達人観光ガイドの会